

県営林道澄水山線開設事業に伴う

御津中の津古墳発掘調査報告書

1985年9月

島根県 松江農林事務所
鹿島町教育委員会

県営林道澄水山線開設事業に伴う

み つ なか つ
御津中の津古墳発掘調査報告書

例　　言

1. 本書は、島根県八束郡鹿島町大字御津 2485 番地に所在する御津中の津古墳の発掘調査の記録である。
2. 調査は、県営林道澄水山線開設事業に伴い、松江農林事務所の依頼を受けた鹿島町教育委員会が、同事務所の協力を得て、昭和60年6月20日から7月25日まで延べ25日間を費して実施した。調査体制は以下のとおりである。

事務局 加納 益雄（鹿島町教育委員会教育長）

井ノ口隆義（同 教育次長）

曾田 稔（同 社会教育主事）

調査員 赤沢 秀則（同 主事補）

調査協力 青山 晴一（鹿島町役場企画課）

調査指導 松本 岩雄（島根県教育委員会文化課主事）

作業員 上山フユ子、上山茂、小笠昭江、小笠敏子、景山スエコ、松浦シメ子、山下光代

3. 調査にあたっては、松江農林事務所森林土木課、同総務課、豊洋建設株式会社の方々に協力いただいた。記して感謝の意を表したい。
4. 本書に用いた方位は、全て調査時の磁北である。よって真北から $6^{\circ}42'$ 東を示している。また、実測図中の高度値は海拔高である。
5. 本書の印刷費用は松江農林事務所が負担し、編集、執筆は鹿島町教育委員会が行った。
6. 出土遺物は、鹿島町教育委員会で保管している。

目 次

I 調査の経過.....	1
II 位置と歴史的環境.....	2
III 調査の概要.....	4
土　　層.....	6
第1主体部.....	6
第2主体部.....	10
出土遺物.....	12
遺構に伴わない遺物.....	13
IV 小　　結.....	14

挿 図 目 次

図 1 鹿島町位置図.....	1
図 2 御津中の津古墳と周辺の遺跡.....	3
図 3 御津中の津古墳位置図.....	5
図 4 御津中の津古墳調査前測量図.....	5
図 5 御津中の津古墳調査後測量図 ・上層図.....	7・8
図 6 第1主体部実測図.....	9
図 7 第2主体部実測図.....	11
図 8 第2主体部出土鉄鎌実測図.....	12
図 9 遺構に伴わない遺物実測図.....	13

図 版 目 次

図版 1 御津中の津古墳遺景・調査前全景
図版 2 調査後全景
図版 3 第1主体部
図版 4 第2主体部検出状況・陥没状況
図版 5 第2主体部
図版 6 第2主体部木棺材痕跡・鉄鎌出土状況
図版 7 墳丘東周溝・出土遺物

表 目 次

表 1 島根県下出土鉄鎌一覧表.....	12
表 2 鹿島町域内の躑躅一覧表.....	15

I. 調査の経過

県営林道澄水山線開設事業に伴い、松江農林事務所（以下農林事務所）から委託を受けた鹿島町教育委員会（以下町教委）は、昭和59年4月～5月にかけて、御津貝塚横穴群の発掘調査を実施した。その結果、同路線内には貝塚横穴群の他にも遺跡が存在することが予想されたので、延長路線内の分布調査の必要性を説いていた。これを受けた農林事務所は町教委に遺跡分布調査の依頼をし、昭和60年5月1、2、4日現地を踏査し、御津中の津古墳を発見した。

町教委と農林事務所は、文化財保護の立場から林道の路線変更も検討したが、遺跡隣接地の土地所有者の同意が得られず、やむをえず事前の発掘調査を実施することとした。

これに基づき、農林事務所からは5月7日付遺跡発見通知書の提出および5月16日付けで発掘調査の依頼があり、これを受けて町教委も同日付けで埋蔵文化財発掘調査通知書を提出するところとなつた。

両者の協議により、6月20日から発掘調査を開始し、前半は梅雨の長雨に、後半は炎天に悩まされたが、調査前の予想を裏切って、古墳は径20m近いかなり大形の円墳であること、後世の耕作により墳頂中心部にあったと考えられる主体部は削平されて現存しないこと、第2主体部は鉄製曲刃鎌を伴う砾床であることなど、多くの成果を得て7月25日に実働25日間の調査を終了した。

この調査結果を同日付けで、松江農林事務所、島根県教育委員会（以下県教委）へ報告したところ、農林事務所からは同日付けで諸事情から路線変更ができず、当初計画どおりに施工したいとの協議があった。町教委は県教委とも協議し、当該地での発掘調査は事業者の全面的な協力を得て古墳のはば全容を知りうる資料は得たと考えられた上、事業の性格等諸事情を勘案すると、当該地での土工事再開はやむを得ないと考える旨通知した。同時に工事中途で新たに遺跡・遺物等を発見した際には、すみやかに文化財保護法に基づく諸手続きをとるよう依頼した。



図1 鹿島町位置図

II. 位置と歴史的環境

御津中の津古墳は、島根県八束郡鹿島町大字御津字中の津 2485 番地に所在し、地目は山林である。この周辺では島根半島東半の山塊が、急峻な海崖をなして日本海に臨んでいるが、この海岸沿いに点在する集落は、わずかな緩傾斜地を選んで立地しており、御津の集落もこういったもの一つで、海に向かってくだるゆるやかだが狭い緩斜面に人家が密集して集落をなしている。この集落の三方を囲む丘陵上には、秋葉山古墳群^{注1}、的松古墳群など箱式石棺を主体部とする古墳が点在することが知られており、集落北東の丘陵の末端近いわずかな緩斜面に位置する中の津古墳もこうしたものの一つと考えられる。標高は約52mで、この地点からは日本海への眺望にすぐれているが、御津の集落はその北部をわずかに望むことができるにすぎない。

注2

この周辺部では、前年度発掘調査を実施した御津貝塚横穴群の他、茶畑横穴群など、10数穴以上の横穴が群集する地帯も知られてきている。しかし、この御津地区では古墳時代を瀬戸時代の遺跡の存在は知られていない。また、集落遺跡についても全く知見がないが、古墳や横穴墓の分布する様子からは、現在の集落と立地を同じくした集落が存在したことは疑いえない。

注3

8世紀代の様相を描いた『出雲国風土記』には、この御津の集落は島根県加賀郷に含まれる「廣さ二百八歩」(370m) の「御津瀬」^{たより}として現われ、この瀬には「百姓の家」があり、「御津社」^{おしま}を祀っていることが描かれている。また、現在小島と呼ばれる御津漁港北西の島も、「三島」と見える。10世紀の『倭名類聚抄』でもやはり島根郡加賀郷に含まれており、平安時代には延暦寺領がおかれていたことが知られている。

中・近世に至ると、御津経塚、御津宝篋印塔といった遺跡が知られる他、文書の記録によれば、この集落は漁業だけでなく、船便を利用した交易の舞台ともなっている。近世には水浦村と称し、松江藩領であった。集落は、わずかな平地に家屋が密集するため、1747(延享4年)年、1782(天明2年)年、1784(天明4年)年、1847(弘化4年)年、1851(嘉永4年)年には火災のため多くの家屋が焼失したほか、1778(安永7年)年には豪雨によって家屋のほとんどが流出するなど度々にわたって災害を被っている。

近代には御津浦という村名であったが、1889(明治22年)年からは御津村と変え、1896(明治29年)年にはそれまで属していた島根郡から八束郡に移っている。戦後、1956(昭和31年)年に他の3町村と合併し、鹿島町の一大字となり現在に至っている。

1. 駒津中の津古墳
2. 秋葉山古墳群
3. 的松古墳
4. 駒津貝塚櫛穴群
5. 条畠端穴群
6. 奥才古墳群
7. 榎原山古墳群
8. 名分丸山古墳群
9. かまの古墳群
10. 小川古墳群
11. 尾張古墳群
12. 向山古墳群
13. 中尾谷山古墳群
14. 面目古墳
15. 狐堀古墳
16. 白煙古墳
17. 古瀬砂丘遺跡
18. 志谷奥遺跡
19. 佐太前遺跡
20. 寺の奥古墳群
21. 岩屋古墳
22. 息谷櫛穴群
23. 寺の奥櫛穴群
24. 清水鬼櫛穴群
25. 尾頭櫛穴群
26. 寺尾櫛穴群



図2 駒津中の津古墳と周辺の遺跡 (1/50000)

III. 調査の概要

御津中の津古墳は、島根半東東半の山塊が急峻な海食崖をなして日本海に臨むその末端近いわずかな緩斜面上である。古墳はこの斜面の標高約52m前後に位置している。この地点は日本海への眺望にすぐれているが、御津の集落はそのわずかな部分を望めるにすぎず、むしろ、この墳丘は日本海上からの視線を意識して築造されたものようである。

古墳は当初、径12~13mのものと考えて調査区を設定した。しかし、調査区隅で淡褐色土の堆積が検出され、この土層は周溝の覆土とわかり、古墳は径20m近いものであったことが判明したが、この時点ですでに排土を調査区周辺に積み上げていたため、全面的な拡張はできず、排土の比較的小ない部分3ヶ所で調査区を拡張した。

墳丘は後世の開墾により著しく現状を変更され、当初墳丘と考えられた高まりは半月形に残っていた。これは墳丘南半分が畠地として削平され、さらに北側で本来の墳丘斜面をえぐるように畠地が設けられたことによる。墳丘は北西部の斜面が最もよく原形をとどめており、それはこの付近に後世墳丘を削平した際に出たと考えられる角礫を集積したために、この部分についてのみ、削平が及ばなかったためと考えられる。この部分で墳丘の高さは約2mである。

墳丘東西の拡張区で検出された溝は丘陵の斜面をえぐるようにして設けられており、墳丘はゆるやかな斜面に「U」字形の溝をめぐらし、墳丘を削り出したものと判断された。また、墳頂もかなりの削平を受けたと考えられ、調査前にも墳丘各地点に箱式石棺材が散乱し、耕作土中に円礫をかなり含んでいたので、本来は墳頂に礎床を有する箱式石棺があったものと考えられる。精査したがその痕跡も認めることはできなかった。

検出した第1・第2主体部は、見かけの墳丘の北端にあり、かなり偏った位置にある。これは墳丘北東部でかすかな段が検出されており、主体部付近では明瞭でなかったが、この墳丘は二段築成のようなテラスが少なくとも北から東側にかけては存在し、このテラス上に第1・第2主体部は設けられたものと考えられた。

この第1・第2主体部には後述する一部重複する関係にある。第1主体部は素掘りの土塙、第2主体部は礎床をもつ木棺だが、蓋のみ石材を使用している。



写真1 発掘調査風景



図3 御津中の津古墳位置図 (1/5000)

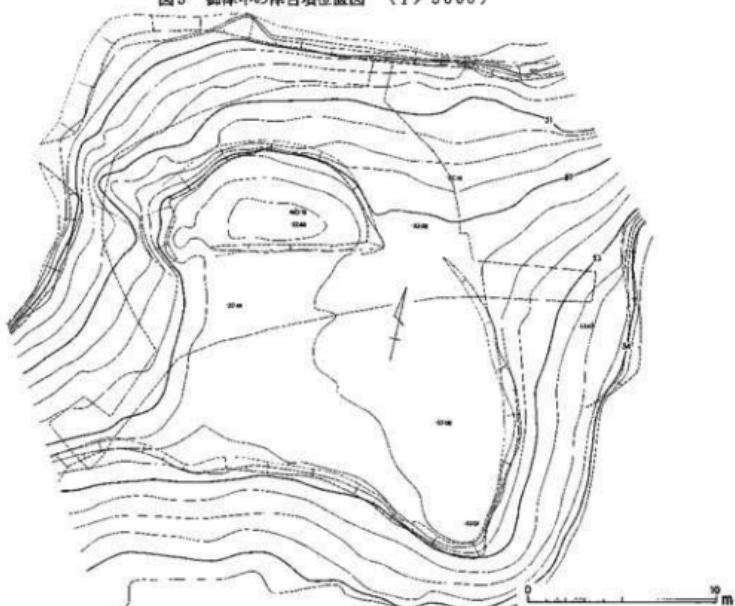


図4 御津中の津古墳調査前測量図 (1/300)

土 層 墳丘はほぼ全面を耕作され、盛土などの痕跡を認めることはできない。ただし、墳丘東西セクション東側では、地山が東へ向かってゆるやかにくだり、淡褐色土の堆積がみられる。この土層は有機物を含み、この付近が古墳周溝とその覆土を示しているものと考えられた。この上層の黄褐色土層中には円礫が多く含まれており、墳頂を削平した土砂が堆積したものであろう。この上面にはほぼ調査区全面を覆うように淡赤褐色の耕作土が堆積している。また、調査区南辺の土層でも、東西で地山がゆるやかにくだっており、古墳の周溝がわずかに耕作を免れて残っているものと考えられる。西側では周溝覆土の淡褐色土が薄く堆積し、東側では後世の耕作が地表面にまで及んでいるが、わずかに地山の立ち上がりが認められ、山側の周溝の一部をとどめるものと考えられた。この周溝は、墳丘斜面から丘陵斜面に続く墳丘北東側では、淡褐色土の厚く堆積するテラスとなっている。周溝は山側のみにめぐらされ、斜面側では墳丘を際立させるテラスとなっているようである。

第1主体部 この主体部はみかけの墳丘の北端近く、墳丘中段位をめぐるテラス上に設けられている。この主体部は墳丘の中心からは偏った位置にあり、中心主体とは考えられない。墳頂にあつたと考えられる中心主体は後世の耕作によって、痕跡もとどめない程に破壊されたようである。

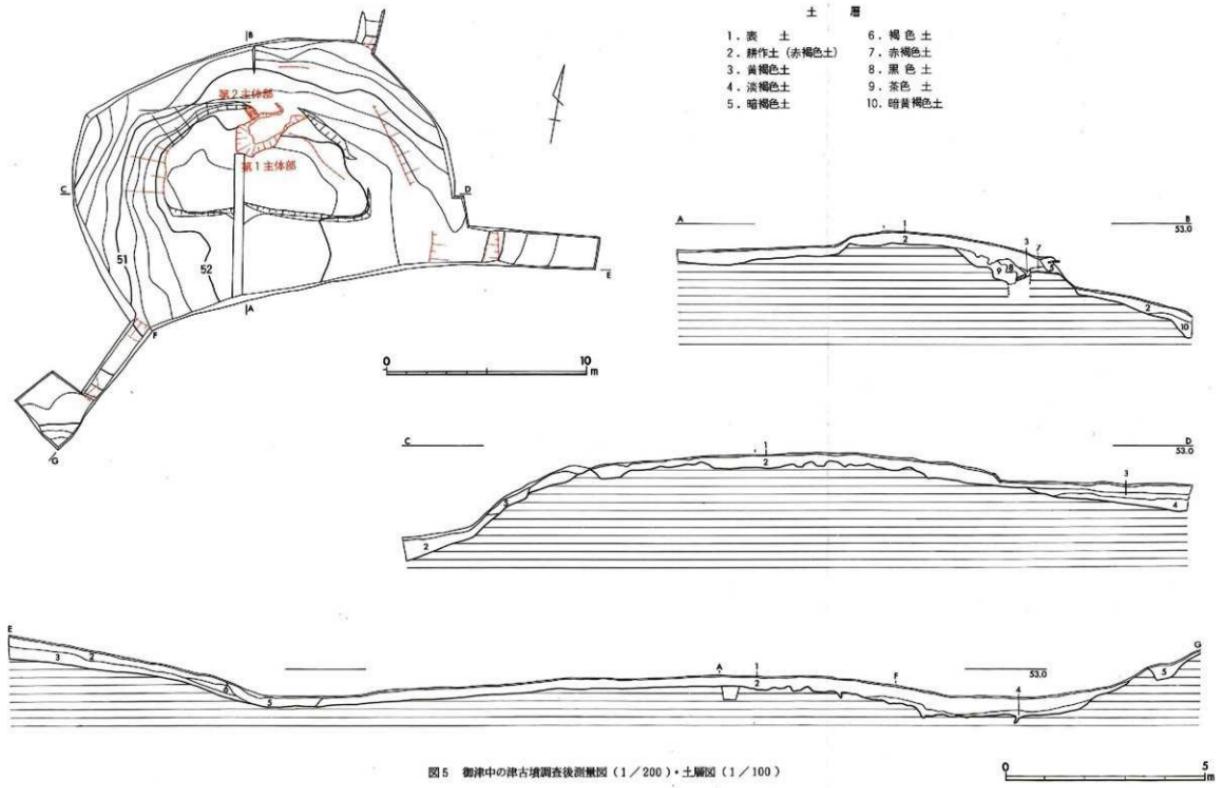
後述する第2主体部は、約半分がこの主体部内に陥没するという位置関係にあり、第1主体部が造られた後に第2主体部が設けられたものと考えられる。しかも、その状況から、木棺を納めたと考えられる第1主体部棺材が腐朽する以前に第2主体部が設けられたことは明らかである。そう考えるならば、両主体部の時間差はさほどのものであったとは思われない。

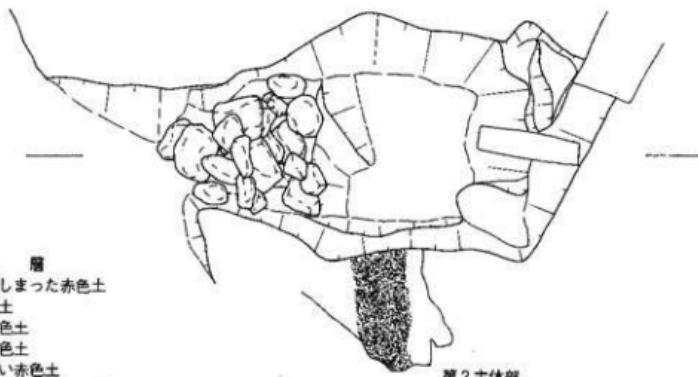
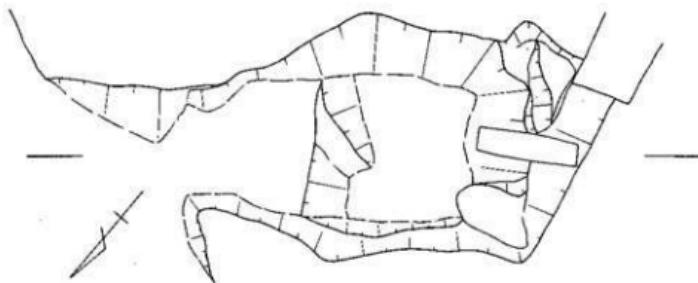
第1主体部内には、第2主体部の蓋石、疊床が陥没し、流れ込んだ状況を呈し、また、耕作土の下層から黒褐色の有機土が深く流入しており、検出できた。また、北東の端部は烟によって削られみかけの墳丘斜面に露出する格好となっていた。

第1主体部土壌内には、この主体部木棺が陥没してからかなり長い期間、内面に空間をとどめていたと考えられ、黒褐色の有機土が複雑に入りこんでいる。しかし、土層は基本的には上層に固くしまった赤色土、下層に砂質の赤色土、黄色土が堆積している。

この主体部は素掘りの土壤で、主軸をN-51°-Eにとるものである。残存長は3.5mを測るが、南西側では地山が著しい角礫層となっていたため、この部分では土壌底は明瞭に検出しえなかった。臺座底が明らかであった北東側では、人頭大の地山ブロックを積み重ねた状況を呈していた。床面では木棺の痕跡などは明らかにできなかったが、第2主体部陥没の状況からは木棺を据えるものであったことは疑いえない。ただ、その木棺は、北東側に地山のブロックを使用するもので、通有の箱式木棺とは趣を異にするものである。

この主体部に伴う出土遺物はなかった。





土層

1. かたくしまった赤色土
2. 黒褐色土
3. 砂質黄色土
4. 砂質灰色土
5. やや暗い赤色土
6. 赤色土(含地山ブロック)

第2主体部

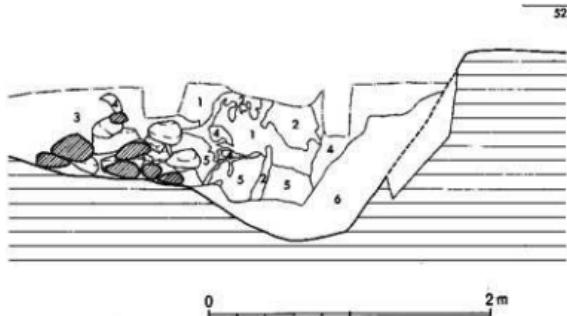


図6 第1主体部実測図 (1/40)

第2主体部 墳丘北側で烟によって削りとられた崖面に石棺材様の石材が調査前から露出していたが、この崖面を清掃したところ、石棺様の石材の下に小指大の円疊が並ぶ面が検出された。疊の上面に重なるようにして検出された石材は、30×20cm程度のもの4枚で、後述するように木棺の蓋石の一部と考えられるが、これら4枚は、表土直下から疊床上面まで掘り込まれる暗褐色土のつまる浅いピット内に残存しており、原位置を保っているものではない。おそらく、後世の開墾に際して発見され、破碎されたものと考えられる。

疊床は主軸をN-49°Wにとり、頭位をおおむね北西に向けるものである。墓壙は疊床面近くで検出することができ、この墓壙底、疊床に沿って溝が検出され、この溝内には疊床横断面図に認められるように疊床に沿い暗赤褐色土が縦方向に残っている。この土層が木棺側枝を示すものと考えるならば、墓壙内に木棺が組まれていたものと考えられる。しかし、疊床北端は開墾により、南半は第1主体部に落ち込んでいるため、棺の痕跡を認めるることはできなかった。これらから、この主体部は墓壙内に木棺を組み、その内側に疊を敷きつめたものと考えられる。疊床は長さ約1.5m程度のものであったと考えられ、幅は0.4mを測る。北端で地山を円形台状に0.08m高く削り残し、それに疊を被せて枕としており注目される。また、疊床はわずかではあるが、東に向かって傾いており、水平ではない。疊床を構成する疊は、5×3cm程度のものから小指の爪大のものまでかなり大きさにばらつきがあるが、北端の枕状の部分および西側溝に沿う部分にやや大きめのものが目立つ。

また、この主体部南半は、第1主体部上面に重複して設けられていたため、第1主体部木棺が腐朽、陥没した際に同主体部内に落ち込んでいた。第2主体部は、木棺蓋に石材を使用していたと考えられ、第1主体内には疊床にかぶさるような形で板石1枚が落ちこんでいた。この板石は特に大型のもので、その重量もあって、著しく陥没したものと考えられる。この石材は、長さ90cm、幅55cm、厚さ7cmを測るものであるが、長辺の一部は、直線的に加工されており、箱式石棺の長手板状を呈している。箱式石棺材として準備あるいは使用されていたものを流用した可能性がある。この石材は緑色凝灰岩のように見える。

陥没した疊床の上面から鉄製曲刃鎌1が検出された。鎌は3ヶ所で折れているが、接合した結果、湾曲していた。陥没した際に蓋石の重量によって変形したものと考えられる。

この主体部は次のように埋葬されたと考えられる。

①墳頂北側に墓壙を掘り、その底面に棺底面とその北端の枕状の部分を削り残し、その四周に木棺棺材を納める溝を掘る。②溝に木板をはめこみ、棺とし、その内側に疊を敷きつめる。この際、地山で削り出された部分に疊をはりつけ、枕とする。③被葬者に鐵鎌を添え、棺内に納める。④石材を木棺上に並べて蓋とする。

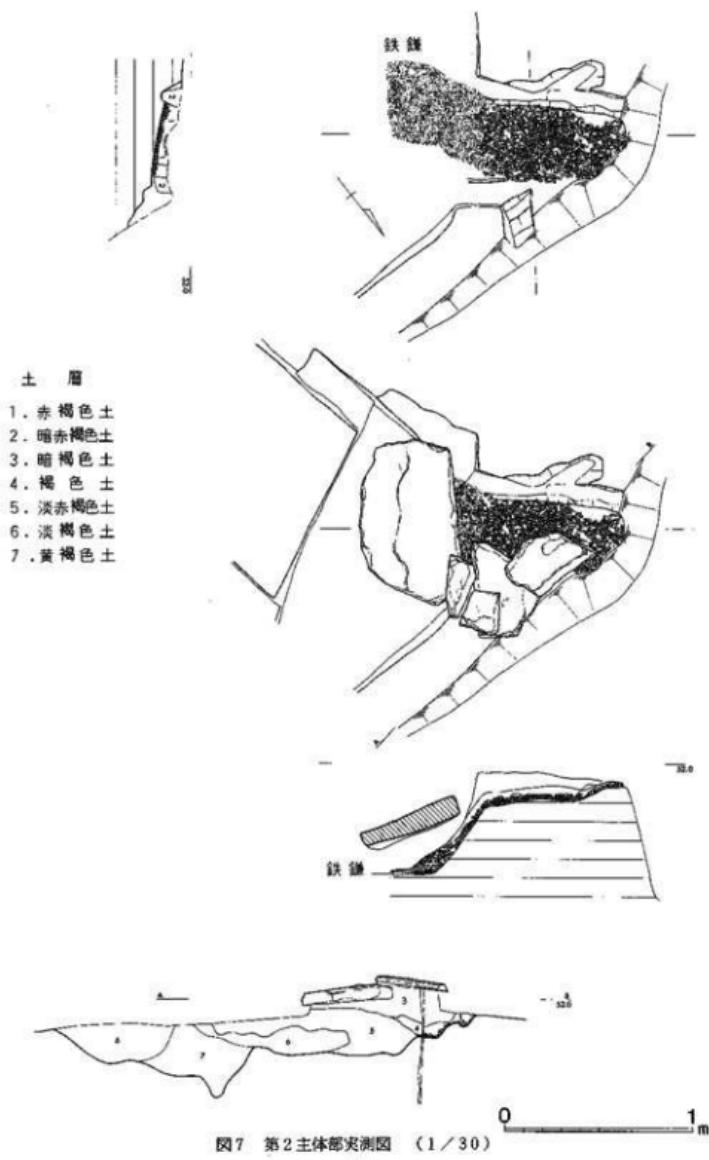


図7 第2主体部実測図 (1/30)

出土遺物 第2主体部の陥没した礎床南上面から鉄製曲刀鎌1が出土している。全長17.0cm、最も広い部分で幅3.7cm、厚さは背部で0.3cmを測るものである。刃部はゆるやかに内湾し、いわゆる曲刀をなす。柄側の端部は装着される木柄が直角になるように大きく折り返している。鎌は蓋石とともに第1主体部内に転落したため湾曲し、3ヶ所で折れている。また、副葬にあたっては礎床上面に直接置かれたものと考えられ、表面に1個、裏面に2個の円錐が銹着している。木質は特に認められず、柄が付いた状態で副葬されたかどうかは明らかでない。

本古墳出土遺物のうち、古墳築

造の時期を示すと考えられるのは

この1点のみである。鉄製農工具

^{注4}の研究によれば、こういった曲刀

鎌は、5世紀前半に古墳への副葬

が開始されることが明らかにされ

ている。曲刀鎌を副葬した本古墳

は、この時期以降に築造されたも

のと考えることができる。しかし、

築造時期の下限についてはその他の要素も含めて検討する必要があ

り、この遺物だけでは決定するこ

とはできない。

島根県下においては出土例の乏しい遺物であり、以下に管見に触れるもの^{注5}を集成する。

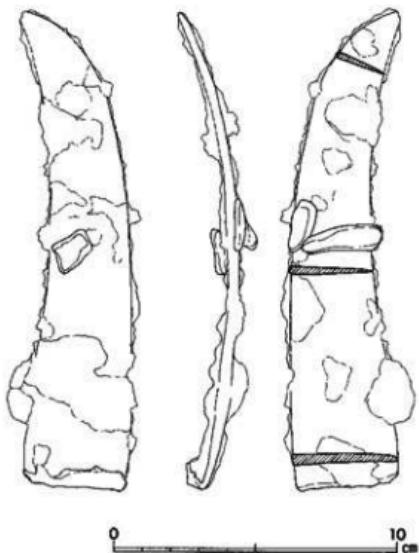


図8 第2主体部出土鉄鎌実測図 (1/2)

表1 島根県下出土鉄鎌一覧表

遺跡名	種類	所在地	時期	注	遺跡名	種類	所在地	時期	注
神原神社古墳	直刃	大原郡加茂町	古墳時代 前	6	松原1号穴	曲刀	八束郡八雲村	古墳時代 後	11
道仙3号墳	"	松江市下東川津町	" "	7	諸友大跡山II群1号穴	"	大田市久手町	" "	12
夷才12号墳	"	八束郡鹿島町	" "	8	機穴	"	能義郡山瀬町	" "	13
御津中の津古墳	曲刀	"	" 中		前立山遺跡	"	鹿足郡六日市町		14
渋谷遺跡B区	"	仁多郡横田町	" 後?	9	高広遺跡	"	安来市黒井田町		15
座王7号墳	"	能義郡山瀬町	" 後	10					

遺構に伴わない遺物 以下の遺物は墳丘各地点から出土したものではあるが、いずれも古墳に伴うとは考えられないものである。

(1)は黒曜石の破片で、石器の製作過程で剥離されたものだが、この1点のみの出土である。(2)は須恵質の土錐で、やや偏平な紡錘形を呈する。長さ2.8cm、幅1.7cmを測る。長軸の中央に貫通する孔をもっている。重さは6gである。棒状のものに粘土を巻きつけて製作したものようである。(3)～(5)はいずれも寛永通宝ではあるが、それぞれ細部には違いが認められる。完成の(3)が最も厚手で、銭文も肉太である。(4)、(5)は一部欠けている。なお、寛永通宝の初鋳は1636(寛永13)年である。(6)は磁器皿で、口径12.4cm、器高2.8cmを測り、径5.8cmの断面台形の高台を有する。口唇部はやや厚めで断面丸く仕上げられ、内面底部には幅1.3cmの浅い凹みがめぐらしくある。内面には濃緑、淡緑色で文様が描かれており、内外面ともに透明な釉薬がかかっている。

(1)は古墳築造以前の遺物、(2)については詳細な時期は不明である。須恵質であることから古墳築造後の遺物と考えておくが、丘陵のかなり高い地点からの出土であり、あるいは削平された墳頂の主体部に副葬されたものであった可能性もすてきれない。(3)～(6)は古墳築造後、近世の遺物と考えられる。

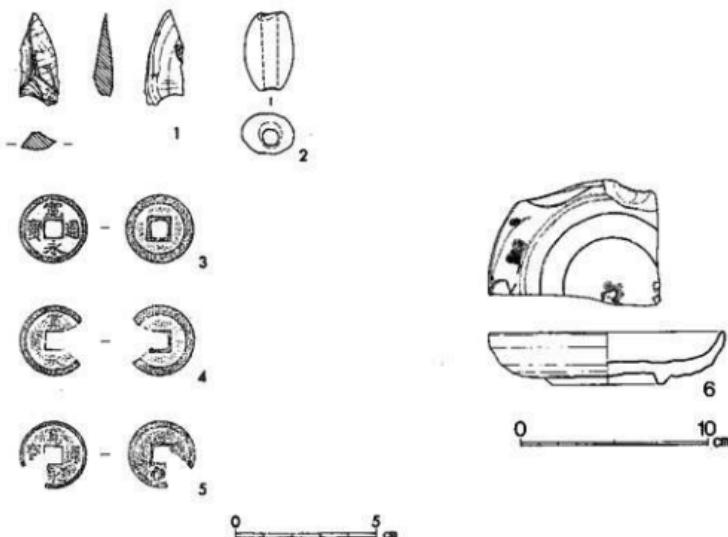


図9 遺構に伴わない遺物実測図 (1～5は1/2、6は1/3)

IV. 小 結

今回の御津中の津古墳の調査によって明らかにしたと、今後の課題を列記して小結とする。

地区・立地 本古墳の所在する御津地区は、北方を日本海に、残り三方を険阻な山地に囲まれ、狭いながらもある程度完結した地域をなしているものと考えられる。古墳はただ1基のみで存在し、日本海は広く臨みうるが、現在の集落はその南半しか望みえず、墳丘は日本海からの視線を意図して造られたものである。

墳丘 径約20mの円墳で、当地区では最大級のものといえる。また、墳丘を築造するにあたっては、丘陵斜面にU字形の溝をめぐらしており、ただ墳丘のみを築いただけでなく、周辺の地形にも手を加えており、かなりの労働力を投入したものと思われる。

主体部 かつては墳頂に礎床を有する箱式石棺があったものと思われ、本町域での箱式石棺、礎床の強い分布をさらに裏付けるものといえる。第1主体部は詳細を明らかにしなかったが、木棺の一方の木口部に地山のブロックを積み重ねるもので、特徴ある構造である。第2主体部は素掘りの土壌内に木棺を組み、その棺内に礎を敷くもので、奥才古墳群などでかなりの類例が知られてきているものである(表2)。ただし、この例は棺内に横たえられる被葬者の頭部に相当する部分の地山を約10cm高く削り残して枕としている。他の例を見るならば、大形の礎を2つ並べるもの、板石を枕にするものなどであり、本例のようなものは初見である。礎床の礎は町域内他例と類似し、青黒く光沢のある黒色頁岩を主としており、こうした礎の供給地を考える上で興味深い。

時期 この礎床から出土した鉄鎌は、曲刃鎌で、こういった鎌の古墳への副葬が開始されるのは5世紀前半からとされ、この古墳の築造はこの時期を上限とすることができるが、畿内等の古墳と軌を一にして、当地に曲刃鎌がもたらされ、直ちに古墳に副葬されたとは考えにくく、上限は畿内よりもやや遅れる5世紀半ば以降と考えたい。一方、下限については、礎床の類例をみると、山陰の須恵器編年Ⅲ期のものを出土するものも知られているが、須恵器を伴う礎床はこれのみで、一応礎床は6世紀の前半をもって姿を消すと考えた方が妥当であろう。よって、この古墳の時期は、5世紀半ば以降から6世紀前半までの間を考えたい。

周辺の遺跡 この御津地区では古墳時代を瀬る遺跡は未だ知りえないが、墳丘出土の黒曜石剝片は極めて断片的な資料ではあるが、古墳時代を瀬る時期にも人々の生活があることを推測させる資料である。古墳時代に入ると、地区をとり囲む丘陵上に秋葉山2・3号墳、的松古墳など箱式石棺を有する古墳が築造されており、こういったものと密接な関係を有してこの中の津古墳も築造されたものと考えられる。特に昨年度調査を行った貝塚横穴群第I支群では、奈良時代に至っても須恵器を横穴内に納めており、横穴被葬者と『出雲國風土記』にみえる「御津浜」の「百姓」との関係

注1
は注目される。

被葬者 隣接する講武地区では、かなり広い可耕地を有し、早くから農業共同体的な結合が成立していたと考えられ、事実、数多くの古墳が続々と造られていったことがわかっているが、その実態は必ずしも明らかではない。この地区は、わずかな可耕地しか有さず、漁業に重点をおく集落であったと考えられる。まして漁業の専業化が未熟な段階であった当時にあっては、集落内での労働編成は成立し難かったとは考えられるが、講武地区と同様の礎床を有するなど類縁性が高く、地形的にはある程度完結するものの、同地区的共同体的結合にこの地区も含めて考えるべきかもしれない。さらに、礎床を構成する石材は、この付近の海岸でしばしば認められることから、この地区的首長の積極的な関与なくしては、下表に示すような濃密な礎床の分布は形成され難いであろう。こうした首長を析出させる生産基盤は、遺跡としては未確認ではあるが、漁業と併行しての土器製塙などに代表される非農業的な生産を想定すべきかもしれないが、現状では想像にすぎない。今後の課題としたい。

表2 鹿島町域内の礎床一覧表

古 墓	所在地	礎床長(m)	間隔(m)	頭 位	副 著 品	特 記 事 項	注
御津中の津古墳 第2主体	大字御津	?	0.40	N-49°W	曲刃鎌1	地山を掘り残して枕とする	
御津秋葉山 3号墳	"	1.7	0.35	E-37°S	EH7以上	箱式石棺	18
奥才5号墳 第1主体	大字名分	2.1	0.6	E-7°N	刀子1		
奥才11号墳	"	4.4	0.45	E-13°N	刀子片2、鉄錐片1	3室に区切る木棺、棒状の石2を並べて枕とする	
奥才12号墳 第1主体	"	3.2	0.4	E-38°N	直刃鎌1、刀子1	深さ約20cmの土壌に隕をつめる	
奥才13号墳 第1主体	"	1.55	0.38	E-27°S	-	箱式石棺	
第2主体	"	1.85	0.42	E-30°S	-	"	
奥才14号墳 第1主体	"	1.80	0.46	E-31°S	内行花文鏡1、方格渦文鏡1、彷彿環形石製品1他	"	
第2主体	"	1.80	0.40	E-34°S	鉄劍1、鉄鎌1、刀子1、鉄針2以上	"	19
奥才17号墳 第1主体	"	1.63	0.49	E-29°S	刀子1、鉄針1	箱式石棺、板状の石を枕石とする	
第2主体	"	1.90	0.40	E-11°N	-		
奥才29号墳 第1主体	"	1.75	0.55	N-16°W	-		
奥才30号墳	"	1.80	0.45	E-1°N	-	棒状石2を並べて枕とする	
奥才33号墳	"	1.75	0.50	N-28°E	-	3室に区切る木棺、中央の室にのみ隕を敷く	
狐塚古墳	大字武代	1.8	0.4	N-20°W	-	箱式石棺	20
臼畠古墳	大字古浦	2.5	0.5	東	須恵器杯・蓋・匙、勾玉1、銅鏡、鉄鎌	"	21

- 注1. 『御津貝塚横穴群発掘調査報告書』 I 鹿島町教育委員会 1984
2. 注1に同じ
3. 加藤義成『校注出雲國風土記』 1965
4. 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」(『考古学研究』13-3 1967)
5. この表でもわかるように、県下の曲刃鎌は古墳時代後期の古墳、横穴からの出土がほとんどで本古墳はその中にあって、かなり早い時期の一例といえよう。
6. 蓬岡法峰『第2編 加茂町の古代』(『加茂町誌』 加茂町 1984)
7. 岡崎雄二郎「2 松江・道仙古墳群」(『島根県埋蔵文化財調査報告書』 第X集 1983)
8. 『奥才古墳群』 鹿島町教育委員会 1985
9. 『沢田宅裏遺跡外調査報告』 横田町教育委員会 1982
10. 『岩屋谷古墳群他発掘調査』 伯太町教育委員会 1981
11. 『八雲村の遺跡—八雲村埋蔵文化財分布調査報告』 八雲村教育委員会 1978
12. 『諸友大師山横穴群』 大田市教育委員会 1983
13. 島根大学蔵
14. 『中國縦貫自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1980
15. 丹羽野裕氏の御教示による。
16. 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』 所収 1971)
17. 注1書
18. 同 上
19. 注8書
20. 『菅田考古』16 島根大学考古学研究会 1983
21. 同 上



御津中の津古墳遠景



調査前全景（東から）

図版 2



調査後全景（東から）



全 景（西から）

図版 3



第 1 主体部



同 上

図版 4



第2主体部検出状況



第2主体部陥没状況

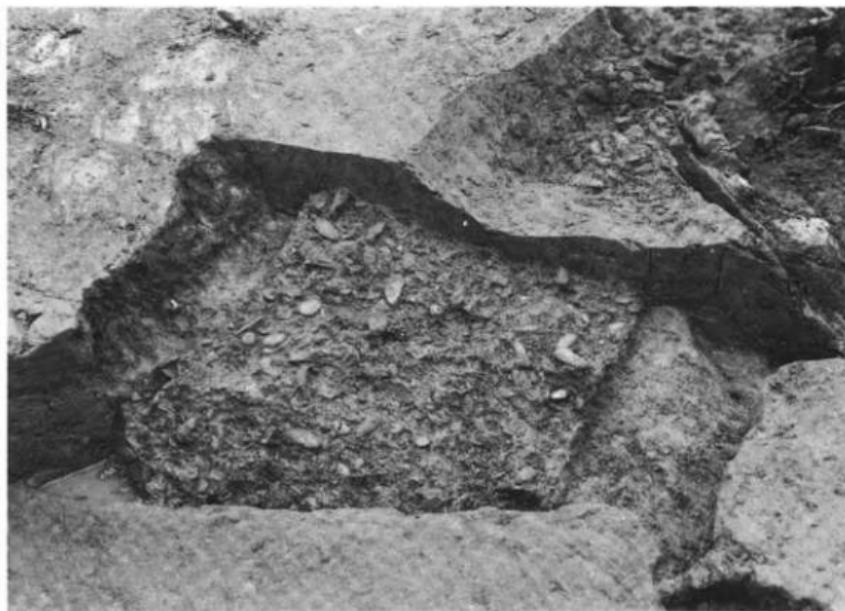


第2主体部（北から）



第2主体部（東から）

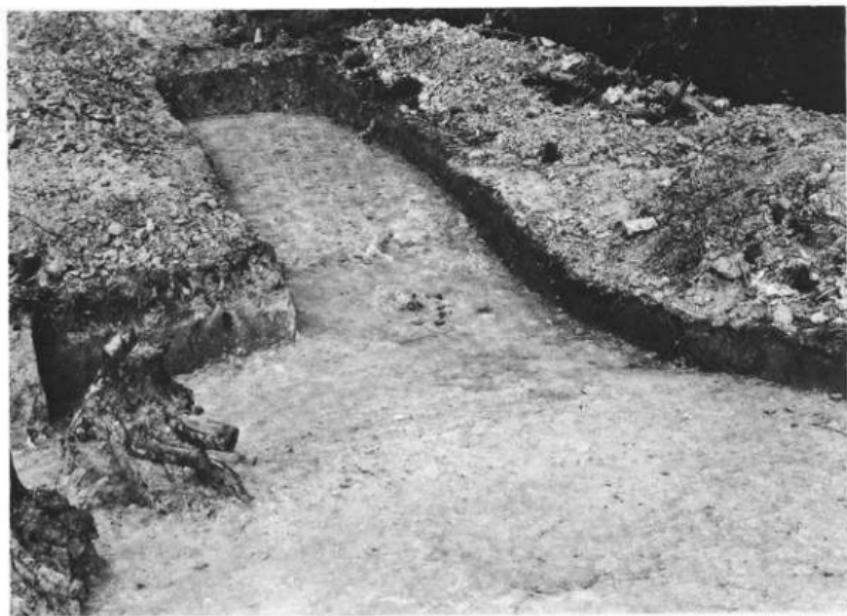
図版 6



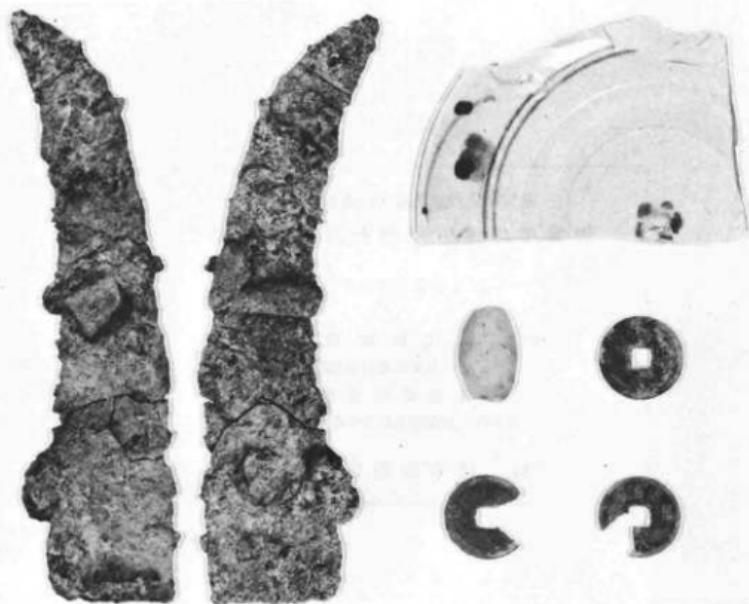
第2主体部木棺材痕跡



鉄鎌出土状況



溝周東丘填



出土遺物

県営林道澄水山線開設事業に伴う
御津中の津古墳発掘調査報告書

1985年9月

発行 松江農林事務所

島根県松江市殿町8

鹿島町教育委員会

島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640-1

印刷 柏木印刷有限会社